

明治 36 年末における兵庫県衛生公職の統計

薬学雑誌 1904 年度 236 頁

先々月の記事(医者への配剤による事故)で少し触れたが、当時の医師には様々な人がいた。その具体的な数字を薬誌の地区通信欄(神戸通信)で見つけた。ここから何かを考える読者もいると思うので羅列する。

明治 36 年 12 月末における兵庫県の医師は総数 1,184 名。内訳は、大学卒業 62、試験及格 236、奉職履歴 17、府県立学校卒 215、従来開業 398、高等学校卒 99、旧試験及格 77、外国学校卒 12、限地開業 2、従来開業子弟 66。従来開業の多くは漢方医だっただろう。ハイカラ神戸を擁する兵庫でさえこの数字である。

一方、薬剤師は総数 117、大学卒 4、高等学校卒 3、試験及格 57、旧試験及格 40、外国学校卒 3、府県立学校卒 10。薬

剤師には従来開業とか、子弟とかの身分の人はいない。彼らは文明開化の新しい学問をきちんと勉強したという自負がある。ゆえに医薬分業導入問題では、自分たちこそ西洋医薬を処方する資格者であると医師に対抗したかもしれない。ただ、総数は医師の 10 分の 1。当時、医師側が医薬分業に反対したときの言い分は、薬剤師が少なく受け入れ態勢ができていないということだった。医師 10 人分の薬は出せるような気もするが、当時の医薬品の品質の悪さ、扱いにくさを考えればそうかもしれないとも思う。そのあたりをメーカーがほとんど解決してしまった現代からは、想像しにくい。

ちなみに、看護婦は 276 名。試験及格 51、県立養成所卒 121、赤十字社卒業 10、赤十字社府県支部卒 62、京都同志社卒 15、その他 53。また、産婆は総数 1,715、内務省免許 72、地方庁免許 132、限地 63、従来開業 1,448。助産婦が一番多いのは、なんとなく明るい社会を感じさせる。

小林 力